

怪物

県立伊集院高等学校 三年

坂 元 優 真

寒風が頬を引つ搔く。電車が来るまで約十分と言ったところか。人の量が少しづつ増えてきた。列の後ろでは同じ学校の生徒たちが雑談に励んでいる。その時、僕の中のアイツが囁いた。

「アイス食いてえ」

「めちやくちや寒いだろ」

「思わず言い返してしまった。」

「でも食べてえ」

「財布を見ろ、ほら、お金がないんだよ」

「いや一個は買えるだろ」

「無駄遣いはしたくない、それにお腹壊したくない」

「つまんねえの」

コイツは怪物だ。いつも僕をそそのかす。たまったもんじやない。

「早く電車来ねえかな」

「あとちよつとで来るだろ」

「いつそのことチャリで行かねえか？」

「何キロあると思ってるんだ、二十キロはあるぞ」

しかもコイツは相当頭が悪い。コイツは僕の中で可笑しい発言を延々と繰り返している。

「最近お前勉強ばっかだよなあ」

「来週大事な試験があんだよ、オマエも知ってるだろ」

「いやそうだけどう、たまには遊んでもよくね？」

「ダメだ、こっちは人生かかってんの」

「つれねえなあ」

「当たり前だ」

ずっと前からコイツは僕の中に棲みついていて。いつからと言うのは具体的にはわからない。気づいたらそこにいたと言う感じだ。

「あの子の太ももめっちゃよくね？」

「そういうのやめろ、気持ち悪いだろ」

「ホントはお前も見たいくせに」

「マジでやめてくれ」

「まあちよつと見るだけならいいんじゃないやね」

「いやまあちよつと、なら、ね？」

そう言っただけでターゲットに照準を合わせようとした瞬間、

「あのー、すみません、このハンカチ違いますか？」

振り返ると僕のハンカチを持った女性が立っていた。さっき財布を取り出した拍子にポケットから落ちたのだろう。おかげで僕はチラ見変態クソ野郎にならずに済んだ。

「あっ、ありがとうございます、スー」

そこには女神が立っておられた。今にも溶けてしまう雪の
ような肌と、宇宙を感じさせるキレイな黒髪を身にまとった
女性が目の前に佇んでいたのだ。

「う、美しいッ」

「確かに」

珍しく怪物と同意見だ。

「少し俺に任せろ」

「何をする気だ？」

「まあ見てなっつて」

怪物に主導権を譲った。そして即後悔した。

「ハンカチ拾ってくれてありがとう、これも何かの巡り合
わせだ、早速市役所に行って入籍しようじゃあないか」

「えっと、すみません、ちょっと何言ってるかわからないで
す」

見事にフラれた。やはりコイツはバカだ。

「いけると思ってたんだけどなあ」

「なわけないだろ」

まったくコイツには呆れる。コイツには僕がついていない
とダメだ。何をするか知れたこっちゃやない。こんな怪物を飼
い馴らせるのは僕みたいな怪物だけだろう。だから僕は、今
日も囁く。